

予備教育コース：現状と課題

衣川隆生 小野正樹 許明子 西村よしみ

要 旨

留学生センターでは、文部科学省の国費留学生を対象として日本語予備教育コースを年2回開講している。当該コースにおいては、学生の必要性や習得度に合わせてコース・スケジュールやカリキュラムを調整するだけでなく、学期ごとにコースデザインに手を加え改良を図っている。本稿では、まず、コース到達目標と、その目標に到達するためのコース・スケジュール、カリキュラム・デザインについて概観する。そして、従来から指摘されてきた課題を解消するために平成15年度に試みた特徴的な活動の目的、方法について説明を加え、最後に今後の課題についても検討する。

【キーワード】 言語教育 コースデザイン カリキュラム シラバス

The Intensive Course: current state and future challenges

KINUGAWA Takao, ONO Masaki, HEO Myeongja, NISHIMURA Yoshimi

【Abstract】 The International Student Center has been offering the Japanese Intensive Course for Monbu-Kagakushou scholarship students twice a year. We have been adjusting the course schedule and curriculum to the students' needs or level of achievement, and improved the course design every semester. In this paper, we survey the goal of the course, course schedule and curriculum design, and then introduce the purposes and methods of new trial learning activities which were started in 2003 for solving the problems existed previously, and go on to discuss some issues for consideration in the future.

1. 予備教育コースの概要

筑波大学留学生センターでは、文部科学省の国費留学生を対象として、大学院入学準備のための日本語予備教育を開講している。このコースは月曜から金曜までの毎日5時間（75分授業×4コマ）、週25時間（20コマ）、コース全体で18週、約450時間のコースで、4月、10月の年2回開講されている。

当該コースは、30名定員である。4月開講の春学期は主に大使館推薦の国費留学生が中心であり、10月開講の秋学期は、大使館推薦、大学推薦、教員研修留学生によって構成されている。さらに、平成15年度秋学期においては、日韓共同理工系学部留学生との混合クラスも編成されている。

2. クラス編成

予備教育コースは4クラス体制で運営されている。各クラスは、学生の日本語習熟度、学習スタイル、到達目標に応じて編成されており、必要に応じてコース中にもクラスの再編成が行われる。

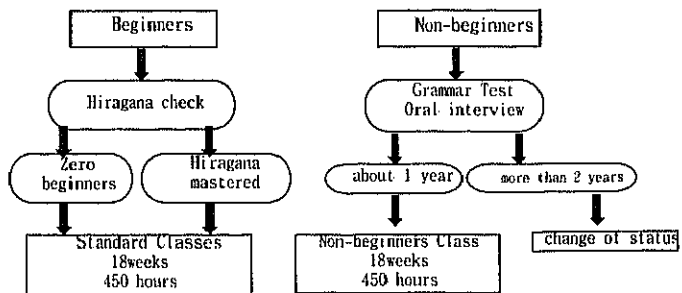


図1 クラス編成の流れ

コース開講初日にクラス編成

のためのテスト、インタビューが行われ、授業開始時のクラス編成が決定される。その流れを図1に示す。

平成15年度春学期においては、予備教育生として28名(21ヶ国)が配置されたが、このうち8名は日本語習熟度が高いと判断され、配置換えの措置が執られた。そして、授業開始時には、予備教育生として残った20名(14ヶ国)が日本語学習歴に応じて4クラスに振り分けられた。具体的には、既習歴無し(8名)により4名ずつの2クラス、ひらがな・かたかな既習の8名により1クラス、150時間程度の既習歴がある4名により1クラスが編成された。

平成15年度秋学期においては、日韓共同理工系学部留学生2名を加えた26名(8ヶ国)が配置された。このうち5名は日本語習熟度が高いと判断され、配置換えの措置が執られた。そして、21名(8ヶ国)が日本語学習歴に応じて、既習歴無し(7名)で1クラス、ひらがな・かたかな既習の10名により5名ずつの2クラス、300時間程度の既習歴がある4名により1クラスが編成された。

3. 指導体制

平成15年度秋学期においては、専任教員7名、非常勤講師11名が予備教育コースを担当し

ている。当該コースはクラス担任制度が採られており、コースの運営方針、コースデザイン、カリキュラムデザインは担任の合議に基づき決定されている。現在は9名の専任教官のうち、4名ずつが隔年で担任を担当しており、担任は担当クラスの授業を週3～5コマ程度担当するように時間割が組まれている。また、専任教官は担任を担当しない年度であっても1～2コマ程度は予備教育コースに関わることによって、コース運営の継続性を確保している。

4. コース到達目標

コース開講時に実施されるオリエンテーションでは、学生に対して以下の目標が提示されている。

The broad goal is to be able to perform in interactive situations using everyday Japanese, specifically:

- (1) to be able to comprehend and orally produce basic sentence patterns;
- (2) to master Hiragana and Katakana and 250-500 Kanji (Chinese characters);
- (3) to read controlled texts in a variety of styles and perform writing tasks;
- (4) to be able to give presentations demonstrating your knowledge of structure, vocabulary, and speaking skills;
- (5) to develop an awareness of intercultural communication.

さらに、到達目標を段階的に図示したものが図2である。この図では、会話(Conversation)、文構造(Grammar)、作文(Writing)、読解(Reading)、漢字(Kanji)が全体的な柱として設定されている。この図はコースオリエンテーションで提示するもので、あくまでも一般的、概念的な目標図である。実際のコース運営に際しては、学習者の習熟度、希望到達目標などに応じて、到達目標を設定している。

上記目標と図2の関係に説明を加えると、目標の「(1)初級文型の理解と産出能力」は図2の「会話」と「文構造」に相当する。「会話」における第一段階の下位目標としては「サバイバルストラテジー」を、第二段階は「社会的相互交渉」、第三段階は「議論」を目標として、最終的にはプロジェクトワークが行えることを目指している。同時に、会話運用能力を身につける過程で、上記目標の「(5)異文化コミュニケーション」が意識化されることも目標としている。「文構造」の第一、第二段階の下位目標としては個人的、地域の情報が得られること、伝えられることを目指しており、その結果として一回目のプレゼンテーションを行っている。上記目標の第三段階としては説明が行えることを目指しており、最終的な目標としてプレゼンテーションを行う。

これらのプレゼンテーションを目指した活動が上記目標の「発表技能(4)」に相当する。

Intensive Japanese Program

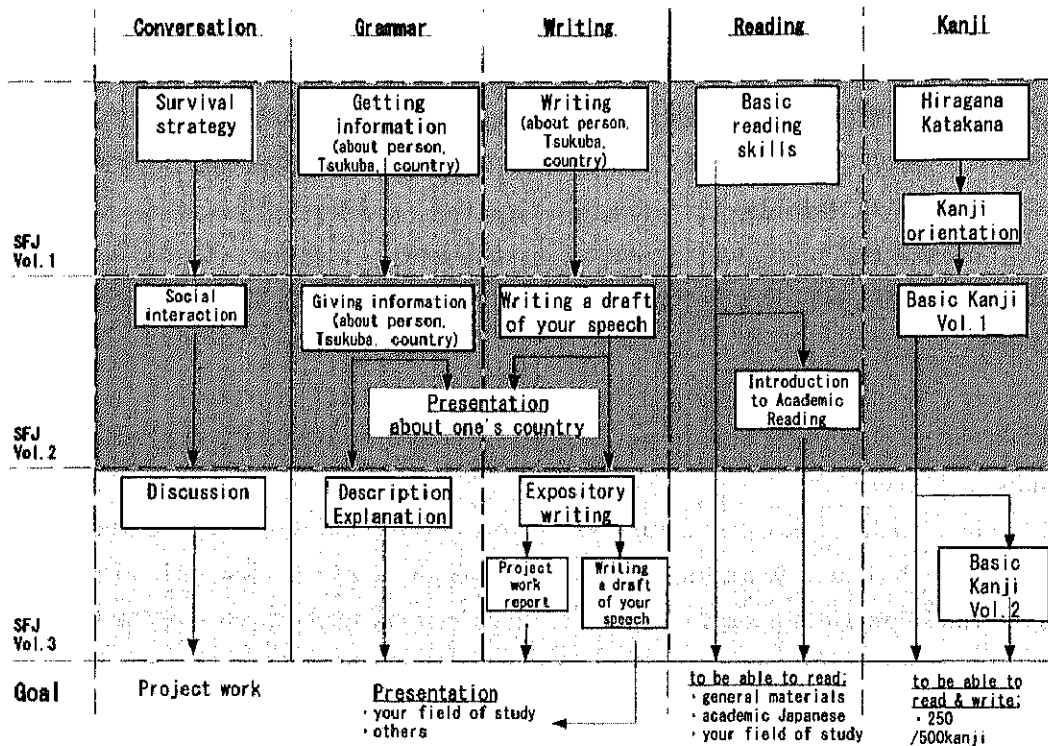


図2 到達目標一覧

目標の「(3)読解・作文技能」は図2の「作文」、「読解」に相当する。「作文」は「(1)初級文型の理解と産出能力養成」の下位目標と連携し目標を設定しており、発表、プロジェクトワークの原稿を作成することに主眼を置いている。「読解」は学生のニーズに応じて一般的な読み物の読解技能を養成するか、専門領域の読み物の読解技能の基礎を養成するかの選択制を採っている。

最後に「(2)表記運用能力」は図2の「漢字」に相当するが、この技能も学生のニーズに応じて250字～500字を目標として選択する方式を採用している。

留学生センターにおいては、これらの目標を達成するため、『Situational Functional Japanese (以下、SFJ と略す)⁽⁴⁾』を主教材として使用している。しかし、SFJ は文法知識と会話技能の養成を中心的な目標として作成された教科書であるため、段階的、組織的に作文、読解、発表などの技能の養成が行うことが難しい。したがって、漢字、読解、作文の技能養成をするためには、その他の教材、補助教材を利用し、目標達成を目指している。

5. コース・スケジュール

表1に標準的な予備教育におけるコース・スケジュールを示す。

表1 コーススケジュール

第1週	開講式・オリエンテーション・プリセッション 第1課およびひらがな学習	ひらがな・かたかな
第2～4週	第2課～第4課 まとめと復習・クイズ	
第4～6週	第5課～第8課 まとめと復習・テスト・研修旅行（1日）	漢字（BK）
第7～9週	第9課～第12課 まとめと復習・クイズ・プレゼンテーション	
第9～11週	第13課～第16課 まとめと復習・テスト	
第12～14週	第17課～第20課 まとめと復習・クイズ	
第15～17週	第21課～第24課 まとめと復習・テスト・研修旅行（2日）	
第18週	最終プレゼンテーション ・修了式	

これは、2.5日に1課のペースでSFJを進み、18週でSFJの3分冊を終えるスケジュールであるが、実際には各クラスの学生の学習状況に応じて、毎学期調整を行っている。

第1週では、開講式、オリエンテーション、プリセッション、ひらがな学習が行われる。通常、開講式が行われる日の午前中にオリエンテーションとレベルチェックを行い、午後コースを修了した先輩に、学習上の注意点や生活上のアドバイスを話してもらう座談会を開いている。予備教育生に対しては、来日時にひらがな学習用教材が配布されている。その教材を利用し、第一週でひらがな学習、及びSFJの第一課の内容を使った自己紹介を学習している。それ以降は、2.5日～3日に1課のペースでSFJを進める。4課に1回、復習とまとめの時間をとり、クイズ、テストを実施している。ここでいうクイズとは、最終成績に加味されない測定、評価であり、主に形成的な評価を行うとともに、クラス間の進度、メンバーの調整を行うために実施されるものである。これに対して、テストは最終成績に加味される測定、評価である。

第6週には日帰りの研修旅行、第17週には1泊2日の研修旅行が実施される。日帰りの研修旅行は以前は博物館などの見学が中心であったが、現在は日本事情学習の一環として、大相撲二十山部屋への練習見学と浅草などの見学が中心となっている。1泊2日の研修旅行は、春学期においては宇都宮・日光周辺、秋学期においては伊豆・鎌倉周辺の工場、歴史的建造物などの見学を行っている。

また、第9週には第一回目のプレゼンテーションを、最終週には最終プレゼンテーションを行っている。

6. 成績及び修了条件

平成15年度までは、以下の基準で成績評価、及び修了認定を行っていた。

成績評価

Three tests (Kanji tests)	70%
Two presentations	20%
Class performance	10%

修了条件

The following are the conditions for receiving a certificate.

- (1) taking all three tests.
- (2) giving both presentations.
- (3) attending more than 80% of total classes.

平成15年度秋学期からは、以下の基準で成績評価、及び修了認定を行う予定である。

成績評価

Tests (including Kanji tests)	60%
Oral Tasks	40%

修了条件

The following are the conditions for receiving a certificate.

- (1) taking all tests and tasks.
- (2) attending more than 80% of total classes.

この成績評価、及び修了認定の基準変更は以下の理由によるものである。第一に、従来テストに際して行っていたインタビュー、ロールプレイを廃止し、S.R.J 各課終了時点で「Check Time」を入れることにしたため、従来のテストの比重を低くする必要があったこと、第二に、従来2回行っていたプレゼンテーションを、秋学期においては細分化し、6回行う予定にしたためである。このプレゼンテーションと上記「Check Time」を組み合わせた評価として、Oral Task という項目を設けた。

7. カリキュラム・デザイン

7.1 標準クラスの場合

表2に、到達目標平成15年度秋学期における週間スケジュールを示す。

このスケジュールは、日本語未習、またはひらがな・カタカナのみ既習の学生を対象としたクラス（以下、未習クラス）の第5週目のスケジュールである。

表2 標準クラスにおける週間スケジュール

	1 時間目 8:40-9:55	2 時間目 10:10-11:25	3 時間目 12:15-13:30	4 時間目 13:45-15:00	Preparation for the day
11月17日 月曜日 げつようび Mon	漢字クラス	発音 L9 Word Cards Dictation ● Submit Review Sheet Lesson 6 Lesson 6 MC Check CD 2-7	アロテイ 真偽の質問文(I) 練習 2-3 Lesson 6 Finishing Up Read Aloud Key sentence Sentence Writing Tasks & Activities	Check Time の準備 Lesson 6	Grammar Check L7
11月18日 火曜日 かようび Tues	漢字クラス	発音 L9 Word Cards Dictation SFJ Preparation on web Lesson 7 ● Submit GC L7	アロテイ ます形のアクセント 練習 1-2 Lesson 7 SD 1-2	わくわく 22/23 Lesson 7 SD 3-4	
11月19日 水曜日 すいようび Wed	漢字クラス	発音 L10 Word Cards Dictation Check Time Lesson 6	アロテイ ます形のアクセント 練習 2-3 わくわく 24 Lesson 7 SD 5-9	わくわく 25 Lesson 7 SD 10-11	Review Sheet L7 DVD L7
11月20日 木曜日 もくようび Thu	漢字クラス	発音 L10 Word Cards Dictation ● Submit Review Sheet Lesson 7 Lesson 7 MC Check CD 1-4	アロテイ 長い文のヤマ 練習 1-2 CD 5-7 Tasks & Activities 1-2	Lesson 7 Finishing Up Read Aloud Key sentence Sentence Writing	Grammar Check L8
11月21日 金曜日 きんようび Fri	漢字クラス	発音 L11 Word Cards Dictation Preparation for Presentation 3	アロテイ 長い文のヤマ 練習 2-3 Reading Activities	SFJ Preparation on web Lesson 8 ● Submit GC L8	

* ●は提出物の提出期限を示す

毎日1時限には「漢字クラス」が予定されている。これは、図2の Kanji 運用能力養成のためのクラスであり、到達目標別のクラス編成となっている。現在、未習クラスは3クラス、15名で構成されているが、これらの学生を表記の習熟度、ニーズに合わせて5グループに分け、週3日ずつ漢字の学習が行えるような体制をとっている。

また、毎日2時限には「発音」、3時間目には「プロソディ」が予定されている。「発音」が体系的にスケジュールに入れられるようになったのは平成15年度秋学期からである。『An Introduction to Modern Japanese⁽²⁾』の発音練習を利用して、単音レベルの発音、モーラ感覚、及び単語レベルの高低アクセントの意識化を目標としている。これに対して「プロソディ」は文単位のプロソディ感覚の意識化を目標としている⁽³⁾。

さらに、毎日2時限には「Word Cards 読み」、「Dictation」が予定されている。「Word Cards 読み」は語学習の促進を、「Dictation」は単文レベルの聞き取り、作文能力の養成を行っている。ここまで説明を加えた「発音」、「プロソディ」、「Word Cards 読み」、「Dictation」の4項目は、到達目標を達成するために必要な下位技能を訓練するために行っているものであり、所要時間は各項目10分程度で、一日、または時限のウォーミングアップとして行っている。

図2の Grammar を養成するための項目としては、大きく「SFJ Preparation on web」「Structure Drills(SD)」「わくわく文法リスニング(わくわく)」がある。

「SFJ Preparation on web」は、週間スケジュールでは火曜日の2限、金曜日の4限に予定されており、各課を始めるにあたって、重要語句と基本文型を予習する CALL 教材を用いた授業である。学生は個人のペースで学習を進め、問題解決の手段として教師に質問、解説を求めることができる。「SD」「わくわく」の使用方法に関しては、SFJ 教師用指導書に詳しいので参照されたい。

図2の Conversation を養成するための項目としては、大きく「Model Conversation(MC)」「Conversation Drills(CD)」がある。これらも教師用指導書に詳しいのでそちらを参照されたい。

さらに、各課が終了した時点で、各課の到達目標を再確認し、達成できたかどうかを形成的に評価する項目として、「Finishing Up」と「Check Time」が予定されている。「Finishing Up」では、まず各課の Key Sentence を発音、プロソディに注意しながら暗唱することを学生に求めている。次に、文法項目を利用した単文レベルの作文を「Sentence Writing」で、さらにゲームなどを利用して図2の Grammar の再確認を行っている。これらの教材に関しても教師用指導書を参照されたい。「Check Time」は、平成15年度から始めた試みであり、各課の到達目標を課題の形式で学生に課し、その課題をビデオ録画し、評価を行っているものである。その目的、方法については8章で述べる。

目標の「(3)読解・作文技能」、「発表技能(4)」、及び図2の Writing、Reading に相当する

項目としては、金曜日の2～3限に予定されている「Preparation for Presentation」、「Reading Activities」がある。「Reading Activity」は読解技能を養成するために実施しているものであり、この段階においては「素材に応じた読解技能の養成」を目標としている。「Preparation for Presentation」は、平成15年度秋学期から始めた試みであり、総合的な日本語運用とともに、基礎的なコンピュータ技能を養成する目的で実施しているものである。この目的、方法についても8章で紹介する。

7.2 平成15年度の春学期 既習クラスの場合

平成15年度の春学期の既習クラスは、既習といっても幅があり、特に1名は、語彙力が非常にあり、日本語学習歴も長いため、一時は日本語研修生から、研究生への配置換えを行い、日本語補講コースの3レベルで学ぶことを打診した学生から、カタカナが安定していない学生までが参加した。そのため、コース開始から3週間は、SFJのVol.1のクイックレビューを行い、文型中心で学習してきた学生にSFJの学習方法を慣れさせた。

表3 春学期既習クラスにおける週間スケジュール

第7週	1 8:40～9:55	2 10:10～11:25	3 12:15～13:30	4 13:45～15:00	Homework
5月19日 Mon	漢学クラス 小野（おの）	SFJ L. 12 Task ディクテーション 酒井（さかい）	プロジェクトワーク について 小野（おの）	作文 長能（ながのう）	Sentence Writing L. 12 Grammar
5月20日 Tue	漢学クラス 小野（おの）	Review L. 9-L. 12 小野（おの）	プロソディ Conversation Test L. 12 渡辺（わたなべ）	プロジェクトワーク 渡辺（わたなべ）	Vol. 1 Test Listening
5月21日 Wed	漢学クラス 平形（ひらかた）	★Quiz L. 9-L. 12 Grammar Listening 加納（かのう）	Quiz Feed back プロジェクトワーク 平形（ひらかた）	読み練習 平形（ひらかた）	
5月22日 Thu	漢学クラス 福留（ふくとめ）	vocabulary check SFJ L. 13 SD1-3 わくわく47 ディクテーション 福留（ふくとめ）	プロソディ Hometownについて 話す・質問する 平形（ひらかた）	日本人学生と話す 福留（ふくとめ）	
5月23日 Fri	漢学クラス 福留（ふくとめ）	vocabulary check SFJ L. 13 SD4-5 わくわく49 ディクテーション 長谷川（はせがわ）	プロジェクトワーク 長谷川（はせがわ）	作文 山崎（やまさき）	

この間に、1名は学習のスピードが合わず、標準クラスへクラス変更を行った。その後、SFJ Vol.2とVol.3を11週間で終え、夏期休暇の後9月に入り、15週目からは『トピックによる日本語総合演習中級 後期』を主教材とした。17週と18週目では、日本語補講コースでも学び、予備教育コースと兼ねて、コースを受講した。春学期の場合、9月に修了した学生が、次にとれる日本語コースが12月になってしまうため、継続して日本語を学びたい学生への措置である。継続して日本語を学びたい学生が4名いたが、プレースメントテストの結果、3名が文型4レベル、1名が文型3レベルにプレースされた。

Vol.1終了後の週間スケジュールが、表3である。

予備コース全体のデザインとして、1時限目は漢字クラスであり、既習クラスは2つのコースに分け、基本コースは、月・水・木の3日でBasic Kanji Book Vol.1、Vol.2を目標とするクラスで、上級クラスはVol.2から始めて、最終的にIntermediate Kanji Bookの4課まで終えた。

SFJの内容は、「Word Cards 読み」、「Dictation」「プロソディ」、「Structure Drills(SD)」、「Model Conversation(MC)」、「Conversation Drills(CD)」は標準クラスと同じである(7.1を参照のこと)。

作文クラスを月曜日と金曜日の4時限目の2コマ設定し、担当者を固定して、初級文法で書ける内容から、グラフ、データの説明までの課題を行った。また、水曜日4時限目は読み物タスクを課した。この他に、プロジェクトワークを2回行い、留学生センター紹介ビデオと、新製品紹介ビデオといったビデオを作る活動を行ったが、これについては8章で述べる。

7.3 平成15年度の秋学期 既習クラスの場合

平成15年度の秋学期の既習クラスは日本語を300時間程度学習したレベルのクラスとして、日韓共同理工系学部留学生の2名、教員研修生1名(韓国)、大学推薦1名(香港)の4人で構成されている。日本語予備教育コースに日韓プログラムの学生が含まれたのは初めての試みであり、その上、年齢差が大きい教員研修生と同じクラスを構成することに最初は不安があった。しかし、幸いなことに教員研修生が積極的に日韓の学生と交流を行い、助け合いながらクラス活動を行ってくれたので、クラス運営として大きな支障はなかった。

既習クラスのカリキュラムの特徴は、1時間目は漢字クラス、2時間目と3時間目はSFJクラス、4時間目は技能別読み書きクラスを入れたことである。日韓プログラムの学生は火曜日と木曜日の1時間目と4時間目に日韓プログラム独自に設けた授業を受けていたため、4人全員がクラスに集まるのは2時間目と3時間目のSFJクラスと月・水・金曜日の4時間目だけであった。

1時間目の漢字クラスも学生のレベルに合わせて二つのクラスを運営した。つまり、日韓プログラムの2名と教員研修生はBasic Kanji BookのVol.1レベルで月・水・金曜日の3回、

表4 秋学期既習クラスにおける週間スケジュール

第6週 11月17日～11月21日 Bクラス

	1時間目 8:40-9:55	2時間目 10:10-11:25	3時間目 12:15-13:30	4時間目 13:45-15:00	その他 宿題
11月17日 げつようび 月曜日 Mon	漢字 Vol1 クラス Vol.1 Test	word cards L13 SD1-4 わくわく 47	dictation L13SD5-7 わくわく 48, 49	聞きとり プロジェクト グループ ワーク	L13GC
	田中 (たなか)	酒井 (さかい)	小野 (おの)	許 (ほ)	
11月18日 かようび 火曜日 Tue	漢字 vol.2 クラス L28, L29	word cards L13SD8-10 わくわく 50	dictation L13CD、MC Role play	聞きとり 新聞記事を 読む	L13RS
	長能 (ながのう)	渡辺 (わたなべ)	長能 (ながのう)	長能 (ながのう)	
11月19日 すいようび 水曜日 Wed	漢字 vol.1 クラス L23, L24	word cards L13 Oral check & feedback	dictation L13 Tasks	聞きとり カタカナ 現代日本文化	L13SW
	渡辺 (わたなべ)	許 (ほ)	田中 (たなか)	田中 (たなか)	
11月20日 もくようび 木曜日 Thu	漢字 vol.2 クラス L30, L31	word cards L14 SD1-3 わくわく 52	dictation L14 SD4-7 わくわく 53	聞きとり エッセーを 読む	L14GC
	許 (ほ)	許 (ほ)	和氣 (わき)	和氣 (わき)	
11月21日 金曜日 きんようび Fri	漢字 L25, L26	word cards L14 SD8-10 わくわく 51	dictation L13 CD, MC Role play	聞きとり 発音練習	L14RS
	和氣 (わき)	長谷川 (はせがわ)	許 (ほ)	許 (ほ)	

香港からの学生と配置換えした教員研修生の中で漢字が弱い韓国人の2名は Basic Kanji Book の Vol.2 レベルで火曜日・木曜日の2回受講するようにした。

2時間目と3時間目はSFJクラスで、春学期の既習クラスと同じく、コース開始から2週間はSFJのVol.1の復習を行い、文型を中心に既習の学習項目を確認しながら、学習方法を

慣れさせた。SFJのクラスでは標準クラスと同様、2時間目は Word Cards で語彙を確認し、3時間目は Dictation で文の聞き取りと書き取りの練習を行った。また、Vol.2 に入ってから各課が終了した時点で「Check Time」で会話能力のチェックを行い、各課の目標が達成できたかどうかを確認した。

4時間目は技能別日本語能力を伸ばすクラスとして読み書きを中心に独自のクラス運営を行った。まず、毎日4時間目の授業に入る前に『毎日の聞きとり50』で聴解練習を行った後、曜日によって技能別クラスを設けた。月曜日は「プロジェクトワーク」、火曜日は「新聞記事を読む」、水曜日は「カタカナ語の使い方と現代日本文化」、木曜日は「エッセーを読む」、金曜日は「発音練習」を取り入れた。Vol.2の週間スケジュールは表4を参照されたい。

8. 予備教育における特徴的な活動について

ここでは、筑波大学留学生予備教育コースにおいて特徴的な活動、または平成15年度に行った実験的活動について、個別にとりあげ説明を加える。

8.1 Check Time

Check Time は、従来より指摘されてきた予備教育コースの課題を解決するために計画された評価・測定活動である。衣川(2001)⁽⁴⁾は、予備教育コースの現状を紹介し、その問題点を以下の疑問の形式で挙げている。

- ・目標指向的なコース運営がなされているか？
- ・目標が明文化され、教師と学習者に共有されているか？
- ・目標に合致した評価がなされているか？
- ・目標が各 Volume、各課、各ユニットに細分化され、有機的に結合しているか？

上記疑問に対する回答を検証する方法として、SFJ NOTES の各課冒頭に記述されている目標記述を取り上げている。例えば、第17課の目標記述は以下のようなものである。

第17課 友だちを誘う Inviting a friend

Grammar

- I. ほしい:want(something)
- II. ~てほしい:want to get something done
- III. ~そうだ<1>:looks (like)..
- IV. Passive sentences
- V. 何でも、だれでも、どこでも、いつでも

Conversation

<General Information>

1. Invitation cards

<Strategies>

S-1. How to invite someone to go somewhere

S-2. How to accept an invitation

S-3. How to decline an invitation

「目標が明文化され、教師と学習者に共有されているか？」という疑問に対する答えを考える手段として、この目標記述についても、以下の疑問を呈し、検証を加えている。

- ・「ほしい」の正確な文法的知識を学習すればいいのか？
- ・「ほしい」の文法的文の生成ができるようになればいいのか？
- ・「ほしい」の社会的に適切な運用ができるようになればいいのか？
- ・知識ベースの目標か？運用ベースの目標か？
- ・どんな話題を使ってできるようになればいいのか？
- ・どんな状況でできるようになればいいのか？

これらの疑問に対して「教師は共通の認識を持っているという想定」、さらに「学習者は教室活動で目標を理解しているという想定」に基づいてコースデザイン、カリキュラムデザインを考えてきた、としか回答できないことが予備教育コースの課題であった。Check Timeはこの課題解決の方策として導入が図られたものである。

さらに、「目標に合致した評価がなされているか？」という疑問に対する答えに対する答えを探る過程で、従来の口頭能力測定の問題点が浮き彫りにされた。従来予備教育コースでは、SFJの4課毎にクイズ、テストを実施しており、この一環として、オーラルインタビューも行われてきた。このオーラルインタビューは時間的制限もあるため、各課の到達目標を網羅的に測定することは不可能であり、どちらかと言えばConversation Drillsの内容が中心となっていた。これは、コース到達目標として示した「(1)初級文型の理解と産出能力」のうち、「会話」に重点を置いた測定となっていたことを意味する。これに対して「(1)初級文型の理解と産出能力」のうち「文構造」は主に紙媒体を使った知識を測定する測定が行われており、学習した文構造を使ってどこまで「初級文型の理解と産出」ができるようになったのかの測定の比重は非常に小さかった。これらの不均等は解消する必要があった。

また、口頭能力を形成的に評価するプロセスが欠如していたことも課題として挙げられる。4課毎のクイズ、テストでは、その結果はフィードバックされるが、その結果、未習得の部

分、問題点が習得、修正できるようになったかどうかチェックされていなかったのである。このような評価方法の課題解決も Check Time を導入することによって解消しようと考えた。

具体的には、以下の考えに基づき、課題の解消を試みた。

- ・各課の目標を設定し、その目標を各課の冒頭に学習者に示す。それにより、教室活動をより目標指向的なものとする。
- ・各課終了後に目標ができるようになったかのチェックを個別に行う。チェックは基本的には教師、学生の形式で行い、その内容はビデオに録画する。ただし、内容に応じて学生同士の場合もある。
- ・チェックが終わった時点で、ビデオを見ながら、フィードバックを行う。その際、評価基準のポイントに注意してフィードバックする。評価基準は、以下の通りである。

・目的達成度

- A ほぼ確実に目的を達成している。
- B ほぼ目的を達成しているが、無駄なところや不明瞭な部分が多い
- C 意図は理解できるが、確実性に乏しい
- D ほとんど達成できていない

・音声

・流暢さ

・文法・文型の正確さ

このうち、「目的達成度」が言語活動全体を評価する項目であり、この項目でB以上をとれば、その課題は達成したと考える。これに対して「音声」「流暢さ」「文法・文型の正確さ」は、問題探索的な評価項目であり、次回以降に注意すべき内容をフィードバックする。1回目のチェックでパスしなくてもかまわない。次回、次々回のチェックを確保し、B以上がとれるようになるまで繰り返す。

- ・課題でB以上をとれなかった場合には、次回のチェックまでに復習をする。このプロセスをB以上がとれるようになるまで繰り返す。

資料として、第9課の Check Time 用教材を付す。具体例はこちらを参照されたい。

8. 2 プロジェクトワーク

既習クラスにおいて、プロジェクトワーク（以下、プロジェクト）として、ビデオ作成を2回行った。1回目のプロジェクトの目的は、既習項目の運用力を高めることにあり、クラス全員ですべてのシーンを作成した。時期は SFJ Vol.1 終了後で、留学生センターを紹介するビデオ作成を行った。内容は、建物や場所の説明、留学生に対し、出身国、日本語学習歴、

専門についての質問と、教師への質問である。インタビューの始め方や、あいづち、終わり方などの会話の進め方を、このプロジェクトでは徹底的に学んだ。この時期、教室外での日本語使用が低く、彼らの殻を破るという目的もあった。

質問者「あの、ちょっとよろしいでしょうか」

回答者「ええ、どうぞ」

このようにインタビューを始め、文型は「お国はどちらですか」、「どのクラスですか」、「日本語のクラスは何ですか」などの、SFJ 初級の学習項目である。次に、建物の紹介で、「ここはロビーです。私たちのクラスは一階にあります。いっしょに、行きましょう」などのような場所説明を行い、最後に教師には敬語を使って、「先生は何時まで働いていらっしゃいますか」のような質問を行っている。

2 回目は、新製品を開発したという架空の状況で、その製品を売るためのコマーシャルメッセージの作成で、説明、紹介、勧めるといった内容である。

説明者「この帽子をかぶると、よく眠れます」のような、可能表現を使って、物を説明する。2 回目のプロジェクト時には、学生の語彙数や、文法力にも違いが出ており、分担し、各自のパートは各自が責任をとるという形式である。

いずれも、デジタルビデオカメラで撮影、録音したものを、Apple 社の iMovie で編集を行った。

8.3 Preparation for Presentation

Preparation for Presentation も、平成 15 年度秋学期より開始した取り組みである。この活動は、1) 従来行ってきた 2 回のプレゼンテーションの課題解決を図る、2) 日本語による基礎的コンピュータリテラシー、作文能力の習得を目指す、3) 自分の発話を発音、プロソディを意識しながら練習し発表させる、という三つの目的を念頭に始めた統合的な取り組みである。

第一の「プレゼンテーションの課題」とは、準備にかける労力、時間に見合った学習効果が期待できるか、というものである。例えば、学生が英語、または母語で内容を考え、それを教師の支援のもと翻訳する、ということも多い。もちろん、実際に、日本語で発表しなければならない場面に直面すればそういう技能も必要になるであろうし、そのように準備した内容を覚え、運用レベルに達している学生もいた。しかし、内容を準備することにほとんどの時間を要し、その内容を覚え、発音に注意して発表するレベルまで達していない学生も多かった。また、専門領域に関わる内容については、聴衆と内容を共有することができなかったり、質疑応答の際、質問の内容が理解できない、または答えられないという場合も多かった。より短時間で、身近な話題で内容が考えられるもの、そして、聴衆と発表者が相互に理

解可能で質疑応答が可能なもの、さらには、聴衆を意識して理解不能な部分の解説を加えられるものに変えられないかというのが、この取り組みを始めた第一の理由である。

第二の「基本的な日本語によるコンピュータリテラシーと作文能力の習得を目指す」とは以下の動機に起因するものである。特に用法を説明しなくてもほとんどの学生は Microsoft Word、Microsoft PowerPoint などを利用することが従来から可能であったが、そうでない学生も存在した。また、それらのアプリケーションの利用効果には差があった。さらに、ワープロ上における書式、正書法などを従来ほとんど指導していなかったため、文単位で改行を行ったり、段落意識の見られない作文も多かった。コースの到達目標の一つである日本語による「発表技能」を習得させるためには、プレゼンテーションを準備し、効果的に発表する際に最低限必要なアプリケーションの使い方を全員に習得させる必要性があると感じていた。

第三の「自分の発話を発音、プロソディを意識しながら練習し発表させる」とは第一の「プレゼンテーションの課題」にも通じる理由である。従来のプレゼンテーション、特に最終プレゼンテーションでは、内容を作り上げることに精一杯で、発音まで手がまわらない学生が多いという課題があった。さらに、平成15年度秋学期より発音練習、プロソディを毎日練習するようになったが、それを自分の発話と結びつけ、自分自身のプレゼンテーションを、わかりやすい発音、プロソディで伝えることを目標としたいというのが理由である。

活動内容

3週間で1度の発表を想定し、コース全体で6回程度の発表を予定している。既習文型を使って表現できるものとし、自分自身、教室内、留学生センター、宿舎、大学、筑波、母国のように、自分の身近な話題から、生活に慣れるに従って徐々に話題を広げていく流れを考え、表2のような目標を設定している。

活動内容	文型等の目標
1. クラスメート・友人を紹介する	名詞文・動詞文
2. 教室・宿舎・研修室等を紹介する	存在文
3. 筑波での生活環境を紹介する	形容詞文
4. 旅行などの経験を記述する	形容詞文（過去・接続を中心に）
5. 国などについて紹介する（客観的描写）	比較文・名詞修飾
6. 観光案内等（主観的描写）	名詞修飾・可能文・授受

また、「教師・学生」という形で内容を作っていくのではなく、できるだけ学生間のピア・レビューを取り入れていく方針である。これは「読み手・聞き手」を意識化させ、それにより、発表時の説明の付与、発音時の卓立の置き方、強弱の付け方を工夫させたいという考えからである。

授業の流れ

授業は以下の流れで進む。

1) Orientation Impact

最終目標を提示し、ここでの最終的に何（言語素材、内容素材、提示素材）を使って発表するのか、を理解すると同時に、活動についての環境設定、動機付け、インプットを行う。インプットは、学生がわかる範囲の内容を使って、実際に学生が発表するのと同様の形態で見せる。

2) Orientation Impact の内容確認と再生作文

Orientation で例示された内容がわかったかどうかを確認する質疑を行い、その応答のキーワードを板書する。次に、キーワードを使って、理解した内容を再生作文する。再生は、表現したことばをそのまま書き取る形ではなく、理解したことを自分で再構成する、という形で行う。次に、学生相互、またはクラスで作文を交換し、チェックする。修正、推敲する際の視点を身につけさせる目的で、チェック項目も提示する。この段階で、メタ言語の部分は英語、または母語になる可能性もあるが、お互いに説明し合うことで、意識下にある推敲、修正の基準を顕在化させることができると考え、それも許容する。

最後に、文をどのような順番で組み合わせる段落、文章を組み立てていけば効果的かを考える。この段階で、既知、未知に応じた語順の入れ替え、係助詞などの挿入などの操作、必要であれば、適切な接続詞等の語の挿入を行う。

3) 情報収集と作文

Orientation で示されたものと同等の内容を自分で準備する段階である。できるだけ、学生間、クラス間で情報を交換しながら、準備すべき内容を収集するような活動もこの段階で入れる。基本的な作文の流れは、再生作文と同じであるが、学生同士のピアレビューの段階で、新出語、未知語についての質疑応答を行い、その結果を作文内容に加えるという作業も行う。

4) 発表用 PowerPoint 準備

発表の際に使うパワーポイントファイルを作成する。ここでもキーワードや未知語が理解しやすくなるような工夫を行う。

5) 練習

練習の段階で、学生に評価表を提示し、どのようなポイントで評価されるかを意識させる。その上で、この評価表のポイントに気をつけながら発表できるように練習を行う。まず、個人レベルの練習では、単音レベルだけではなく、強弱、スピード、プロソディなどを考えて、効果的な発表をするためには、どう話せばいいかを考えさせるようにする。次に、グループ練習の段階では、学生が主観的に判断できるチェック項目（早すぎないか、遅すぎない

か、抑揚がなさすぎるか、ありすぎるか)などを提示し、聞き手の立場でお互いにコメントできるようにし、聞き手を意識した話し方を目指す。

6) 発表

この段階までの練習は、クラス単位で行ったが、全体で発表の機会を持つ。この段階でも、上記グループ練習で利用したチェック項目を使って、お互いに評価させる。

7) フィードバック

自分自身の課題を意識化することにより、次の発表に生かすためフィードバックの時間を持つ。

9. 今後の課題

ここまで主にコース到達目標と、その目標に到達するためのコース・スケジュール、カリキュラム・デザイン、特徴的な活動について紹介してきた。ここまででも述べたように、当該コースは、学生の必要性や習得度に合わせてコース中にコース・スケジュールやカリキュラムを調整している。それだけではなく、学期ごとにコースデザインには手を加え改良を図っている。そういう意味では、この予備教育コースは、言語教育における新しい試みの効果を測定することができる実験的なコースであるとも言える。

しかし、今後、私費留学生や短期留学生も含むさまざまな学生を集中コースで受け入れる可能性があること、それに伴い単位認定が行えるコースを目指す可能性があることを考えると、少なくとも単年度内においては、固定したシラバス、コースデザイン、カリキュラムデザインでコースを運営しなければならない。そのためには、現在行っている内容について吟味し集中コースにおける標準的到達目標の規定、目標到達のための方法論の規定、及び到達度測定のため操作的な概念規定を行う必要がある。これが、今後の最大の課題である。

さらに、衣川(2001)で指摘した予備教育コースの課題のうち、以下の2点は再度検討する必要があるだろう。

- ・目標に合致した評価がなされているか？
- ・目標が各Volume、各課、各ユニットに細分化され、有機的に結合しているか？

「目標に合致した評価がなされているか？」に関しては「Check Time」導入によってその改良が図られたことを紹介した。その結果、目標に合致した評価は行われるようになったが、その分、教師側の負担は増加している。従来、4課に1度行われていた口頭能力測定が各課ごとに行われるようになっただけでなく、その測定項目も、選択的ではなく、網羅的になったためである。この負担を軽減するための測定方法を考える、またはスケジュールに評価時間も組み込むなどの工夫が今後必要である。

さらに、「目標が各 volume、各課、各ユニットに細分化され、有機的に結合しているか？」という疑問に対しても「Check Time」導入によって、「目標が各課、各ユニットに細分化された」と答えることが可能である。しかし、細分化された目標をどのように有機的に結合させ、各 volume の目標とするのか、そして、それをどのように測定、評価するのかについては、まだ明確な回答を行うことはできない。この疑問に対する回答をさぐることも今後の課題である。

(資料)

Goal for Lesson 9 "Check Time"

- 1) Look at the topics below and choose one topic which you want to show.
You can choose other topics.
Using the structure listed below, describe how it is or how they are.
- 2) Answer the teacher's questions.

Topic

Your country · Your home town · 日本 · 東京^{とうきょう} · つくば
つくば^{つくば}大学 · 留学生センター^{りゅうがくせい} · 日本語 · 宿舎^{しゆくしゃ} etc

Structure

- (I-adj) くて、_____。
- (Na-adj/Noun) で、_____。
- (verb) て form、_____。
- _____が、_____。

(I-adj) くなりました · Na-adj/Noun) になりました

- 3) Your friend will be absent from school. Tell your teacher about your friend's situation. (See Drills page 18)

- (1) 筑波ランゲージグループ(1991)『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE』凡人社
- (2) Mizutani & Mizutani(1997) *An Introduction to Modern Japanese*, The Japan Times
- (3) このユニットでは、平成 13 年度に留学生センターが実施した同志社女子大学河野俊之先生(現横浜国立大学)の音声教育セミナー配布時のハンドアウトを教材として使用している。
- (4) 「国際シンポジウム 初級日本語教育における諸問題の国際比較」配布資料